

「ヤマユリの里」復活に向けて

「八王子やまゆり咲かせ隊」の活動を通して

八王子市総合政策部政策審議室主幹 田口 秀夫

はじめに

ヤマユリは、山や丘陵の日当たりのよい斜面に生える多年草（球根から生育）で、東北から近畿までの地域、特に関東、中部地方を中心に広く自生し、花径が25cm程度にもなる大型の日本特産のユリである。

農家のお年寄りの話では、戦後の八王子市内の里山にはヤマユリがたくさん咲き、7月のお盆の時期には花屋が切花として採取していくほどであったという。当時はたくさん自生していたので、それをとがめる者もなかったようだ。

しかし、近年ではヤマユリが開花する7月中旬に市内の里山を歩いても、まれにしか見かけることはできない。長野県と山梨県のレッドデータブックでは、「絶滅危惧」に移行する可能性がある「準絶滅危惧種」に指定されており、一市民として絶滅を大変心配している。

このような中、自分たちの手で「ヤマユリの里」を復活することはできないかと考え、平成17年5月に市職員等でボランティア団体「八王子やまゆり咲かせ隊」を結成し、栽培に取り組み始めた。これまで4年間の取り組みを通じて、「ヤマユリの里」復活の可能性について検証したい。



美しく咲くヤマユリの花

1. 市の花ヤマユリの誕生

ヤマユリが市の花に選ばれたのは、市制施行60周年の記念事業として、「市の木」、「市の花」を市民から投票していただいた結果である（「広報はちおうじ」昭和51年10月1日号より）。当時の後藤聡一市長は広報の中で、「市の花として『ヤマユリ』が選ばれました。制定された花の積極的な活用をはかり、これからの八王子市が緑陰の豊かなまち、花の香りの満ちあふれるまちとして、発展するよう努力したいと考えます」と感想を述べている。また、同広報には、「市の花を公園に積極的に植栽していく計画です」と書かれている。

現在では、ヤマユリの名を活かしたいという趣旨から、「やまゆり館」と名づけられた施設や、公園には「やまゆりの小径（こみち）」と命名されている散策路があるほか、市の刊行物にはヤマユリの写真が広く使われるなど、市のシンボルフラワーとして活用されている。

2. 他市の状況を調査

ヤマユリをシンボルフラワーとしている自治体は、神奈川県のほか、山梨県大月市、道志村、千葉県袖ヶ浦市、茨城県行方市、真壁町（現桜川市）、栃木県益子町、群馬県中之条町、長野県御

代田町、福島県月舘町（現伊達市）など関東周辺に集中しており、ヤマユリの自生環境と重なっている。また、これらの自治体と保護活動をしている市民団体が構成される「全国やまゆりサミット」の第1回が1993年に開催され、以降、情報交換と未来に向けてヤマユリを咲かせる努力をすることを目的に活動している。

ヤマユリをシンボルフラワーにしている自治体がどのような取り組みをしているか、ホームページで調べてみたところ、各自治体は「自生地の保護活動」、「小学校での栽培」、「観光協会と市によるイベント開催」、「町民を対象とした栽培講習会の開催」、「『やまゆりの里』などの石碑の設置」など、さまざまな活動に取り組んでいた。しかし、市町村合併が進んだため、ヤマユリをシンボルフラワーとしていた市町村は、それまでの76から約20も激減している（平成18年7月26日付の朝日新聞より）。

次に、ヤマユリの増殖方法を知るための書籍等を探したが専門書は特に見つからず、都内でヤマユリをシンボルフラワーとしていた奥多摩町に電話で問い合わせをした。担当者によれば、奥多摩町は以前、ヤマユリを町の花として人工栽培などに取り組んだが長続きはせず、自生の花が見られなくなったことから、ミツバツツジにシンボルフラワーを変更したとのことであった。

その際、奥多摩町の担当者から「山梨県大月市が精力的に活動している」との情報をいただいた。早速、大月市に問い合わせると、ヤマユリ研究者である大月市花木振興研究会の顧問小俣虎雄氏（なお、小俣氏にはその後も引き続き私たちの栽培指導を継続していただいている）をご紹介いただいた。

17年5月、本市の職員等6名で小俣氏を訪問、ヤマユリの増殖方法について教えを乞い、「八王子やまゆり咲かせ隊」を結成してチャレンジすることとなった。



ヤマユリ研究者の小俣虎雄氏

3. 種から栽培することを選択

小俣虎雄氏からは多くのことを学ぶことができた。ヤマユリの特性は、種を蒔いてから花が咲くまで5年かかることであり、ヤマユリの種は夏を過ぎないと地上に葉が出てこない「地下遅発芽型」という特殊な生育をする。すなわち、秋に地上に落ちた種は翌年の夏を地中で過ごし、翌々年の春に初めて地上に葉が出てくるわけである。

大月市では、市のシンボルである岩殿山にヤマユリを復活しようと年間5,000球の球根を移植したそうだが、イノシシ被害や盗掘など取り組みを阻む問題があり、復活できないという状況を知った。ここで、ヤマユリを増殖する5つの方法を示す。

方法 : 球根を購入して植栽する

方法 : 種から増殖する

方法 : リン片（球根の片）をバラバラに剥がして植えつける

方法 : 茎の地下部にできる木子（キコ・小球根）を植えつける

方法 : 組織培養

それぞれの特徴を挙げてみよう。方法 は、球根を秋に植えれば翌年夏には花が鑑賞できるという良い点があるが、たくさんの花を咲かせるには費用がかかり過ぎる（市販の球根は1個1,000円程度）うえ、生物多様性に配慮した地元種の保存につながらない。

方法 は、経費がかからず、地元種の保存ができるほか、親株がウイルス病に感染していても種にはウイルス病が感染しない性質があるため、生育した球根にはウイルス病が伝わらないという利点がある。しかし、花が咲く球根まで育てるには5年という長い期間がかかる。

なお、方法 と は、増殖効率が良くない。方法 は、バイオ技術を活かし約10日で発芽させる方法であるが、無菌状態を作ることができる研究室がなければならない。

以上のような5つの増殖方法を比較したうえで、最終的に私達は方法 の種から栽培することを選んだ。なお、花が咲くまで5年かかるところを、人工的に4年に短縮できる方法を活用したとしての結論である（解説は後述）。

4．やまゆりサミットへの参加

平成18年7月、「第12回やまゆりサミット」が山梨県大月市民会館で開催されるにあたり、八王子市からは、市職員のほか、八王子市老人クラブ連合会員、住民協議会役員など約20名が参加した。

サミットの内容は、記念講演「国営武蔵丘陵森林公園に自生するヤマユリの生育と林床管理の関係について」、情報交換会として「大月市における植栽活動の記録」、それにパネルディスカッションなどであった。パネリストと来場者との質疑では、「環境に配慮した栽培方法をするべき」との意見が出されたほか、「人間が手をかけなければ絶滅するわけだから、栽培にあたって一定の薬剤散布はやむを得ない」との発言も聞かれ、参加団体がそれぞれの考えで幅広い栽培活動をしていることを知る機会となった。

同年8月には、大月市で開催された「やまゆりサミット」で記念講演をされた永留先生を訪問し、ヤマユリが自生を続けられる環境について学んだ。永留先生は、関東最大級のヤマユリの名所として知られる埼玉県「国営武蔵丘陵森林公園」で、ヤマユリの研究をされている。

その結果、ヤマユリの開花率は日照の具合と定期的な下草刈りで高くなることを知った。一言で言えば、炭焼きなどで定期的に雑木林を間伐して、下草刈りをし、落ち葉掃きなどを継続している里山の環境を一番好むということであった。

5．種からの栽培にチャレンジ

平成17年秋からは、採取した種の温度処理に挑戦した。まず、種の表面に付いた雑菌をなくすため、ベンレート（広範囲のカビ性の病気に効果があり、浸透性に優れ、予防と治療の2つの効果がある薬剤）500倍液に30分漬けて消毒。その後100ccの種と、パーミキュライト（農業や園芸に使われる土壌改良用の土）300cc、水100ccを混ぜて、ビニールに密閉してインキュベーター（卵を温めて、「ひよこ」に孵す孵卵器。0～60を0.1単位でセットできる）に保存した。なお、温度処理の各段階における温度と保存日数、その狙いは次頁のとおりである。



第12回やまゆりサミット開催の様子



種の温度処理をするインキュベーター

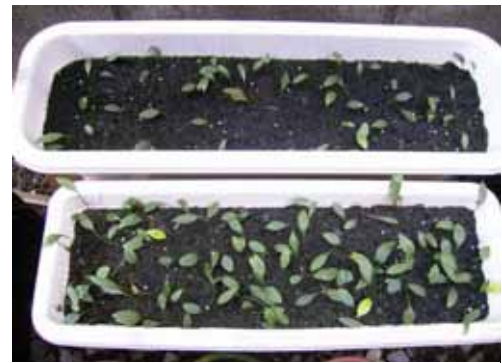
- ・第1段階：30 で56日間保存(夏を体験させる)
- ・第2段階：18 で21日間保存(秋を体験させる)
- ・第3段階：5 で42日間保存(冬を体験させる)

これにより、ヤマユリの種は夏、秋、冬と1年間が経過したと思ひ込み発芽する。その種を4月に蒔けば、葉がすぐに地上に姿を現してくるというわけである。

自然界では葉が出るまでに18か月かかるところを人工的に6か月に短縮できるのだが、ここで気をつけなければならないことがある。それは、ヤマユリの実生1年目、2年目は地上に葉が1枚しか出ないため、か弱く、プランターで細心の注意を払いながら栽培する必要があるという点だ。雷雨にさらされたり、太陽光に当たり過ぎたりすると枯れてしまう。すなわち、里山の林の中のような、落葉樹の下の涼しく、木漏れ日が当たるような環境でないと生き残れないのだ。

自然の状態では6月には葉が枯れてなくなるが、プランターを里山のような環境の場所に置くと、9月末まで元気に育つ。条件が良いと、11月まで葉が緑色をしているケースも見られる。そこから、プランターを使えば安全で効率的に栽培できることが分かる。

プランターで2年育てたヤマユリ(球根)は、秋に大きめの鉢や地面に移植する。これを毎年繰り返すことで、ヤマユリを増殖する取り組みが可能となる。



プランター内で育つ実生1年目のヤマユリ

6. 発芽種を栽培したい方に無償配布

以上の取り組みを進めていくにあたり、1人で栽培できるプランターの数には限界がある。そこで、ヤマユリを栽培してみたいという方に「里親ボランティア」という形で栽培をお願いすることにした。新聞紙上での協力依頼や老人クラブの方々への声かけなどの結果、毎年100人近い方からボランティア希望の声が寄せられている。平成21年4月には4度目の温度処理が成功し、同月19日に栽培を希望した市民の方々に配布できた。これまで4年間で延べ464人が栽培している。ボランティアさんからは、「プランターの土から芽が出ているのを発見した時には感激した」、「もう花が咲きました」など、お便りが寄せられている。また、プランターによる栽培だけに限らず、農家の里山を借りての栽培実験も行っている。自然の中でどのように育つか、結果を楽しみに見守っている。

ヤマユリ育てて下さい
八王子市職員中心に活動

八王子市で、年々目にする人が少なくなっている市花・ヤマユリを、市民の手に増やしていき、市職員が中心となって繁殖活動を始めた。老人クラブ

ヤマユリの種と土などを混ぜ合わせる市職員ら

連合会と協力してボランティアで取り組み。17日は約20人が市役所に集まり、温度管理などが難しいヤマユリの育て方の説明を受けて種をまいた。

ヤマユリは傾斜地の雑木林などに自生しているが、イノシシが食べたり、人が持ち去るなどして減っている。種がまかれてから花が咲くまで5年かかるヤマユリは、発芽する確率は100分の1程度といわれ、自然繁殖が難しい。しかも、種から発芽するまでは丸1年かかるという。

グループでは、難しい発芽を自分たちで行い、苗を希望する市民に配布して育ててもらおう計画を立てた。発芽までは保温器を使い、温度を30度、15度、5度と順に下げながら人工的に四季を作り発芽を促す。この日は、約2万粒の種を土や水と混ぜ合わせて保温器に入れた。うまくいけば、4月には大半が発芽するという。ボランティアリーダーの田口秀夫さん(51)は、「一つでも多く発芽させて、多くの市民に育ててもらいたい」と話していた。

新聞でも活動が紹介された
(2005年12月18日読売新聞より)

7. 現在までの結果

プランターなどで4年間栽培してきたが、種を蒔いて花が咲くまで育つ確率は6割程度と見ている。昨年は7リットルの種を採取して温度処理をし、発芽した種をボランティアに配布した。種の数に換算すると7万粒となり、そのうち、花が咲くまで育つ種は4万2,000粒となる。すなわち、毎年花が咲く球根が約4万球生産できていることになる。



実生4年目に咲いたヤマユリ

8. 市内の自生と保護状況

本市で自生しているヤマユリは、高尾山で多数見ることができるとともに、恩方地区、上川地区の山裾や都立長沼公園などでわずかに見られる程度である。都立長沼公園では、公園ボランティアが私達と一緒に栽培活動を展開しているが、絶滅の危機に瀕しているといえる。

その原因は、人が雑木林とともに生活する「里山」と言われる、ヤマユリが好む環境がなくなったことである。下草刈りの頻度が高いほど、またその継続機関が長いほど、ヤマユリの着花数は増加する。

加えて、猿やイノシシなどの野生動物による被害と、人間による盗掘もヤマユリの自生を阻んでいる。市内でヤマユリが自生する地域（都立林業試験場や上川地区）を視察した結果、イノシシはヤマユリの根元の地面を、直径10～15cmほどのピンポイントで掘って球根を食べていることが分かった。穴の周囲には、見事な花が付いた茎から上だけのヤマユリの残骸が落ちていた。上川町などの自生地周辺の畑では、イノシシから作物を護るため、畑の周囲をすべて金網で囲んで保護している状況である。また、高尾山では、イノシシからヤマユリの球根を護る策として、自生する地面にゴルフ用ネットを敷き詰めていた。これによりイノシシが地面を掘れなくなるほか、自生地の斜面の土が崩れるのを防いでいた。

また、日本一のヤマユリ自生地と宣伝している茨城県行方市を視察したところ、偶然にも自生地の地主の方に会い、話を聞くことができた。その結果、花が咲き終わるころを見計らうかのように、夜中に大量の盗掘が絶えないとのことで、やむを得ず、近年ではヤマユリまつりが終わった後に、ヤマユリすべてをエンジン刈払機で刈ってしまうとの衝撃的な話を聞いた。地上部分を刈ってしまうと、どこにヤマユリがあるかわからなくなり、盗掘はできないとのことである。ヤマユリの球根は、花が散ってから秋にかけて太る性質なので、刈ってしまうことで球根の生育は止まってしまうが、「盗まれてなくなってしまうよりはいい」との苦渋の決断だと言う。



ケーブルカー「高尾山駅」に自生するヤマユリ

なお、市内では自生するヤマユリを残すため、上川町を始めとするいくつかの地域で、ボランティアによる里山の草刈りが行われている。

市内の川口やまゆり住民協議会では、平成9年に1万球の球根を購入し、住民に配布したことがある。だが、関係者に聞いた話では、大半はイノシシに食べられ、現在残っているものはないとのことである。

9. 多くの市民とのふれあいが生まれた

「やまゆり咲かせ隊」の活動も5年目に入るが、活動を通して多くの方々と知り合うことができた。地域のために歩道や公共施設に花を植えているボランティアさん、ヤマユリの保護に取り組んでいる農家の方、公園の植物保護をしているボランティアさん、東京都市町村職員年金者連盟八王子支部やまゆり育成クラブの皆さん、ヤマユリが自生している恩方地区の方々、毎年たくさん種を寄贈してくれる(株)高尾登山電鉄など、多くの方々にご協力をいただいている。

全国からも毎月のように、「ヤマユリが見られなくなったので、種を分けてほしい」などのメールが「やまゆり咲かせ隊」のホームページに寄せられている。このような取り組みは、多くの市民とともに進めていくことが大切であると感じている。

多くのヤマユリを見られるようにするため、ボランティアとして退職者の協力を求めたい。また、里山のそばに位置している農家の協力が必要だと思っている。更に、「高尾山の群生地をどう維持していくか」も今後の研究課題である。

おわりに

ヤマユリをプランターや鉢植えで種から栽培することは、この4年間の取り組みを通して一定の軌道に乗せることができた。また、花の咲く球根をたくさん手にすることもできた。これにより、ヤマユリを種から栽培して増やせることは実証できたが、今年からは第2ステージに移りたいと考えている。それは、生育した球根をどう里山に戻していくか、イノシシや盗掘の被害から守るためにはどうしたら良いか、ということである。

八王子市は、丘陵地に残る里山は都内において最も多い自然に恵まれたまちである。『八王子市みどりの基本計画(素案)』では、基本理念を「みどりを市民と行政との協働により次世代に継承する」とし、その実現のための主たる施策では「里山の保全に取り組む」としている。ヤマユリの栽培に適した里山、残された里山をさまざまな担い手によって有効に活用すれば、ヤマユリの里復活は可能と言える。そのためには、多くの市民とともに力を合わせて取り組んでいくことが最も必要なことであると考えている。

そして、高齢者には昔懐かしいヤマユリの香りを届けられるように、また、子どもたちにはヤマユリの花の力強さを知ってもらえるよう取り組みを継続し、さまざまな団体と協働して次世代にヤマユリを残していきたい。



里山での栽培活動風景

参考文献

- ・小俣虎雄『ヤマユリ 球根の増殖と花の楽しみ方、自生地復元』、農山漁村文化協会、2007年
- ・根本淳・永留真雄・佐立昌代「武蔵丘陵森林公園におけるヤマユリの生育と植生」、『日本緑化工学会誌』第34巻 第1号、2006年
- ・『八王子市みどりの基本計画(改定版)』[素案]

(たぐち ひでお)